

2010 年度共同利用・共同研究課題申請書（新規）

申請者(主査)：中谷英明

1. 共同利用・共同研究課題名	
和文	総合人間学の構築
英文	Elaboration of Generalized Science of Humanity
2. 研究期間	2010 年度～ 2011 年度 (2 年間計画)
3. 共同利用・共同研究課題を実施する専任教員	(氏名) 中谷英明 (役割分担) 総括・インド古典学
(同上)	(氏名) 峰岸真琴 (役割分担) 副査・言語学
(同上)	(氏名) 宮崎恒二 (役割分担) 社会学・人類学
(同上)	(氏名) 芝野耕司 (役割分担) 情報科学
(同上)	(氏名) 床呂郁哉 (役割分担) 社会学・人類学
4. 共同研究員採択数	20 名
5. 共同研究員に求められる役割分担	研究会出席・研究会発表・論文執筆 (和文もしくは英文または仏文) 国際シンポジウム・パリワークショップ参加 (有志)
6. 共同利用・共同研究課題の概要 (400 字程度) (※要覧等広報の際にも利用・掲載します。)	
<p>拡大する科学技術は、地球と人のところという二つの自然を大きく変えようとしている。紛争、貧困、社会やところの脆弱化・荒廃、自然破壊など、直面する諸問題は深刻である。前身となったプロジェクト (6 年間) では、諸問題解決の糸口を求めため、人間に関する総合的共同研究を、とりわけアジア諸文明の文化伝統の視点を重視しつつ行う新学術領域「総合人間学」の構築をめざしてきた。</p> <p>哲学、人類学、古典学、言語学、社会学、政治学、経済学などの人文・社会科学、及び脳科学、遺伝子学、動物行動学、情報学などの自然科学の研究者が集まり、各領域から人間に関する最重要情報を持ち寄って共有し、各領域の認識枠組みを再編しつつ新学術領域を構築する試みは、人文科学の脱欧州化を目指しているフランスの人間科学館 (パリ) との共同研究としても遂行され、多くの成果が提出された。本研究課題はこれらの成果をよく再検討し、学術的 (仏文・英文)、一般向け (日本文) の 2 種の出版物をパリと東京から出版しつつ、さらなる前進をはかろうとするものである。</p>	
7. 研究の目的 (400 字程度)	
<p>現在の人文・社会科学の弱点は、1) 総合的な視野 (生物史、人類史、文明史、脳科学、動物行動学等の視点を統合する視野) を持つ「総合的専門領域」、2) 知の総合による「知の認識枠組みの変革」、3) 総合知の戦略的応用に関する「実践知」、の不在ないしは手薄さであるとする。総合人間学研究課題の目的は、この弱点を補うためアジア諸文明の文化伝統を考慮しつつ、人文・社会科学の中に「総合を専門とする新領域」を構築することである。</p> <p>今期 2 年間の本研究課題の目的は、この 6 年間に明らかとなった、世界が直面する諸問題、人類の歴史、文明の歴史、人間の特性、言語と世界観などを包括する総合的視野に基づき、1) 各領域の認識枠組みの変革を行い、2) それによって生成した総合知を生かす人と社会を作るための戦略について考察すること、である。とりわけアジア諸文明の文化伝統の視点を生かした戦略構想を検討する。</p>	

8. 研究の意義、特に共同利用・共同研究として展開することの意義（400 字程度）

科学技術の飛躍的進展とそれによる世界の変容は、日増しに速度と規模を増加している。それにとともなって生起する人のこころや社会、地球環境のひずみも格段に大きくなっている。人文・自然両科学の研究成果が「人にとっての意味」という視点から総合的に評価され、その視点から最も重要な知見を集め、あるべき人類社会のかたちを具体的に描くことが今日ほど望まれる時代は無い。

この知の総合を一人でやることは時間が掛かりすぎるばかりでなく、今日の知識情報量からして不可能に近い。こうして「総合知」を実現する場は諸領域の専門家の直接対話しかないにもかかわらず、現在、世界にそのような場は極めて限られている。アジア発の学術分野は皆無に近いと言ってよい。「総合人間学」は人類の未来社会構想のための重要かつ希少な場を構築するアジア発の初の試みである。

9. 共同利用・共同研究として期待される研究成果、および共同利用・共同研究効果（400 字程度）

40 余年前、フランスの人間科学館は F. ブローデルによって「学際的共同研究の場の構築」をめざして創設された。日本においても AA 研をはじめとする共同利用・共同研究諸機関は、一領域内の共同研究ばかりでなく、学際的共同研究を今後更に積極的に推進する必要があるであろう。本プロジェクトは、ともに共同利用・共同研究を本務とする AA 研と人間科学館の学術協力協定に基づき、自然・人文科学の全体を統合する共同研究を実施してきた。それは「人文・社会科学の脱ヨーロッパ化」という目標を 10 年来掲げている人間科学館とアジアの視点を重視する「総合人間学」が歩調を合わせて推進してきたことである。従来ヨーロッパ発の人文・社会科学の弱点を補うものとして、アジア発の総合人間学の周辺の学術への影響は、今後いよいよ増してゆくものと考えられる。

10. 研究の実施計画（800 字程度）

総合人間学の推進を図るため 2 年間の間に次の事項を実施する。

- (1) 研究例会（年 2 回）
- (2) 研究成果刊行：一般向け商業出版（東京）と学術書（パリ）を刊行する（2010 年末～2011 年初）。
- (3) 総合人間学国際シンポジウム（東京・年 1 回、合計 2 回）
国外から一領域の最先端研究を行っている 1～2 人の研究者を講師として招き、公開シンポジウムを開催する。第 7 回及び 8 回のシンポジウムとなる。
- (4) 総合人間学ワークショップ（パリ・2010 年 6 月（企画中））
これまで 2 回のワークショップ（パリ人間科学館、2008 年・2009 年）を受け、第 3 回をパリ人間科学館において開催する。パリ側の参加者は、M Aymard, JP Changeux, JL Dessalles, D Lstel, A Reboul, F Taddei 他。
- (5) 第 55 回国際東方学者会議シンポジウム「仏教における意識の形成と認識の転換」（東方学会・2010 年 5 月 21 日）
斉藤明（東京大）、Collett Cox (Washington 大)、佐久間秀範（筑波大）、桂紹隆（龍谷大）、宮崎泉（京都大）、中谷英明（AA 研）を講師とし、中田力（新潟大）をコメンテータとして開催。
「意識の形成と認識の転換」は第 5 回シンポジウム及び第 2 回ワークショップのテーマであった。これを仏教において更に深く考察する。Cox 教授招聘費は東方学会負担。
- (6) 総合人間学ウェブ・サイトの更新（随時）
<http://www.classics.jp/GSH/> のページの更新。

11. 研究成果の公開計画（200 字程度）

- (1) 公刊計画
 - 学術書：Information sur les Sciences Sociales 誌の「総合人間学特集号」2011 年初頭・パリ人間科学館が刊行する雑誌に総合人間学論文特集号を一冊刊行する（現在編集中）
 - 商業出版：日本語で論文集を商業出版する（現在出版社と交渉中）
- (2) 総合人間学ウェブ・サイト <http://www.classics.jp/GSH/> によって、研究会、シンポジウム、ワークショップの内容を公開する。

12. 応募者に求める提出書類

「総合人間学に対する私の視点と貢献」と題する 400 字程度の文章。